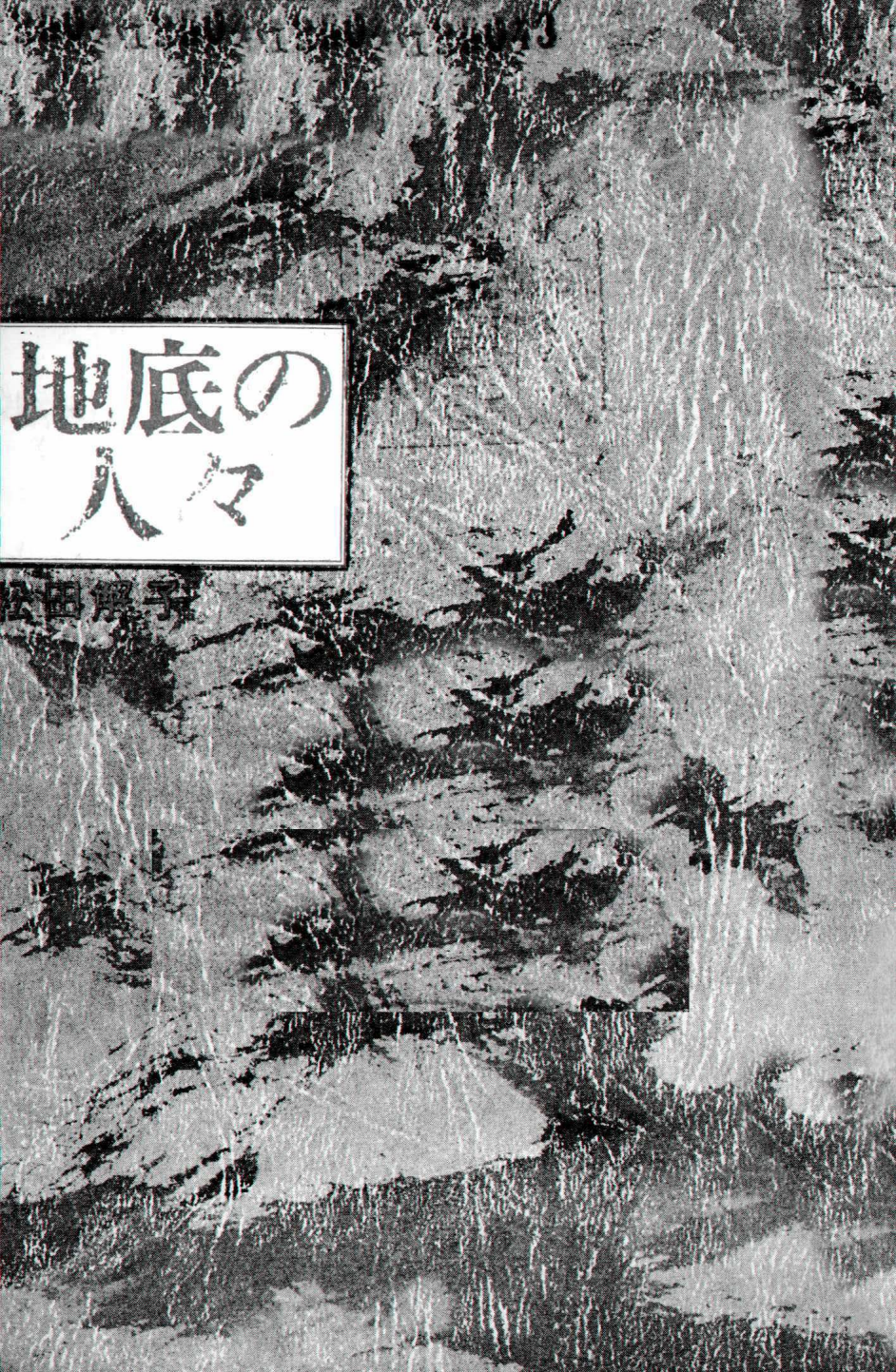


地底の
人々

松田解子



地底の 人々

松田解子

松田 解子

1905年 秋田県荒川鉾山に生れる

日本民主主義文学同盟員

主たる作品

「女性苦」「女性線」「町のなかで」「おりん口伝」正 続

「乳を売る」

地底の人々

定価九五〇円

一九七二年 六月 一五月初版

著 者 松田 解子

発行者 沢田 明治

発行所 (株)民衆社

東京都千代田区神田神保町一ノ二七

電話 東京〇三―二九四―七七九七

印刷所 東銀座印刷出版K・K

落丁・乱丁の場合はお取替え致します

地底の人々

一章

一

坑道はくらかった。あつかった。硫黄くさかった。

わけでも堂屋敷坑から七ツ館坑へつづく連絡坑道はしめりがひどくてむしあつかった。連絡坑道のまうえを花岡川がながれている。そのせいだともいわれていた。

『大東亜戦争』がはじまってから三年目の一九四四年（昭和十九年）五月二十九日、——戦争さえなければ鉾山は公休日にあたる日の午前中のことだった。

その川ぞこの、電灯ひとつない坑道を、一の番で長屋をあとにした娘手子のタツ子が、たったひとりで七ツ館坑へむかつてあるいていた。

タツ子はダイナマイト箱をしっかりせおっていた。この四月、国民学校をでたばかりで、まだ坑内になれていないタツ子は、ぬらぬらする足もとの泥土に何度ものめりかけてはあやうくその場にふみこたえた。頭がこつと、天井の坑木にぶつかった。タツ子はあわてて体をかがめた。

今日はじめて、しかも、七ツ館の若狸でとおっている職頭の伊沢からふいにいつけられてせおったせなかの箱のなかのマイトや雷管が、そのはずみにカタコトいうけはいが、タツ子の背すじにつたわった。

「……」

タツ子はなにか叫ぼうとした。が、声がでなかった。そのくらやみ——そのくらやみのなかでまだ十五にしかないタツ子が、せつなせつなに感じているものは、なれることのできない恐怖であった。同時にそれは、人目にとまることのない恐怖でもあった。いまタツ子をてらしだすものといつては、そこにたつたひとつ、タツ子自身が右手ににぎりしめたカーバイト・カンテラの青いほのおがあるだけだ。

恐怖のため、もうひとつは、せなかのマイトや雷管を伊沢職頭からいつかつたとおり、七ツ館坑の切羽でまっている手掘坑夫やさく岩夫にいつくも早くわたさなければならぬという責任感のため、タツ子はじぶんの頭がいやというほどぶつかった天井の坑木がどうなっているかをさえ、たしかめて見ようとはしなかった。しかし長い青いカーバイト・カンテラのほのおはそれをてらしだした。

天井の坑木はタツ子の頭すれすれのところでV型に折れかかっていた。折れかかったすきまからは黒魼どくとくの、にぶく底光りのする、そしてじつとりとしめりをふくんだ魼体が、いまにもなだれおちそうにのぞいていた。V型に折れかかったその坑木は直径一尺ちかくの杉丸太だった。長さは七、八尺。坑道の巾と比例していた。折れた坑木のあとさきにびっしりつづいた坑木

は『』型にたわんでいた。坑道の両側の坑木も天井のそれとおなじ長さ、おなじ太さの杉丸太だった。それもびっしりとならんでいたけれど、さきにゆくにしたがって『ノ』の字なりにのめっていた。ひと足ごとに坑道の天井がタツ子のひたいにのしかかった。坑内保安係がくさをみつめて支柱夫に命じてとらせたのか、それとも支柱夫がじぶんで見つけてぬいたのか、両がわの坑木が、ときおり歯ぬけのようにかけていた。そこからも、じつとりとしめりをふくんだ鉋体がのぞいていた。足もとはまんべんない泥、地下水にとけた凝灰岩ぎようかいの青みがかった泥土だった。その泥土にめりこんで鉋車用レールが複線に四条這はっていた。枕木がしかれていたが、それは泥にまみれて人目にとまらなかった。

空気はむし風呂のように濃いしめりをふくんで重たく熱していた。鉋床がふくんでいる硫化物が、地熱ととけあつてかもしだす硫黄くさい熱気だった。

この鉋床が何百万年も昔『第三紀時代』に熱水交替作用ねつすゐこうぎでできた『交替鉋床』だということ、熱水交替作用といえ、地底にあるいろんな鉋分をふくんだ何千度というガス溶液が、岩石のわれ目づたいに『上昇』して、岩石と交替して鉋物がちんでんしたものだということ。——そういうことを、坑内保安係や技手などが、おりにふれて坑夫たちに話している。それをタツ子は、古参ふるまのさく、岩夫や支柱夫から（ことに七ツ館でたびたび顔をあわせているさく、岩夫の政吉親爺おぢから）又聞きしていた。

——だから——と政吉おどはいった。——この鉋床は、一つの鉋床のなかにあちち、鉋物をふくんでいる。金も、銀も、銅も、硫化鉄も、硫黄も、鉛も、亜鉛あしんもある。おまけに石膏かすまであ

るんだ。日本に交替鉱床というものはここにだけあるわけではないが、こんなに多種類の鉱石をひとつの鉱床にふくんでいる例はない。いや世界じゅうにだって、こんななんでもかんでもふくんでいる鉱床はない。——政吉おどは、かなりじまんげに、ちよいちよいしぼりだすように学問ことばをいれて説明した。そのときだけは、『学者』になったように、人相まできまじめになった。そしてまたその話は、けっしてただのホラではなかった。げんに堂屋敷や七ツ館の鉱床がそのとおりであつた。

政吉にかぎらず、坑夫たちは鉱床のことを『鉱体』とよんだ。（入坑してまもないころ、タツ子はよくそれを『交替』とまちがえた。交替！ それなら一の番が二の番にかわることだ。番がかわつて坑外へでられるということだ！）どうして鉱体とよぶかといえば、こゝは足尾や別子や尾去沢^{おきざわ}鉱山とちがい、鉱石が、かたい岩石のなかに脈になり、筋になつてつまっているのではなく、ちやうど、とてつもなく大きなじゃがいもかさつまいものように、ひとかたまりにかたまつて、ごろりと体を横たえているからだというのであつた。ところがその体のできかたが、できかたなので、よその鉱山の鉱床とくらべては話にならないほど、むづかしい。だからこゝの坑夫は、よっぽど氣をつけてかせがねばならない。——これが古参の坑夫たちの、しんまい手子にたいする注意だつた。そしてそれもまったくそのとおりだつた。そのうえ、そのもうい体が地表^{かみ}から何百尺も底まで何段にも掘りえぐられ、坑道ごとにくつもの切羽をもち、そこにさく岩機が、タガネがうちこまれ、そのくっさく孔にダイナマイトがしかけられ、導火線^{みちびき}がむすばれ、点火され、鉱体はもう手も足も胴もなくなるまで、ところきらわずえぐりとられてきたのである。とくにこの

『大東亜戦争』になってからは、昼夜の見さかいかもなく掘りに掘らせ、ひとりふたりの落磐死などは、あたりまえのことのように、危険をかえりみない乱掘がつづけられていたのである……。タツ子はいっしゅんギョッとしてぼう立ちになった。バリン！ という音が坑道にはねかえった。まぎれもなく坑道の天井の、あの径一尺の杉丸太が、また新しく折れた音であった。その音が、てまえから、つまり七ツ館坑からきたものか、それともうしろの堂屋敷坑からきたものか、タツ子には判じかねた。坑道がはねかえした反響がそれほどすさまじく、それほどタツ子はおびえきっていた。——坑内ばたらきをはじめてからこの六十日ちかいあいだに、何度となく聞いてきた音ではあったが、どうしてそれになれるなどということができよう。

バリン！ また鳴った。

「あや——」

タツ子がつぶやいた。

「やまうごく……」

立ちどまろうとも思わず立ちどまった。

やま——鉱床をつつんでいる岩盤ぜんたいが、そのままゆるぎだしてきそうな——そのことを坑夫たちは『やまうごく』といった——恐怖にタツ子は全身をこわばらせた。カーバイト・カンテラの青いほのおが、坑道の空気の震動でひきつるようにちじれた。

二一

「こねえなァ、マイト。なんとしたのだべ」

七ツ館^{ななだて}三番坑の切羽のひとつでは、肩巾のがっしりとひろい、しかしいくらか猫背ぎみの、三十すぎのさく岩夫が、たったいま腕木^{うでぎ}にのしかけた機械のハンドルから手をはなしたばかりだった。このさく岩夫がタツ子たちのいう『政吉おど』であった。

はなれすぎたふたつの眉のあいだにしわをよせて、おもしろくなさそうに口をつぐんだ政吉のまゑで、さく岩機は油じみたピストンの筒口から、まだ暴れ足りなげにエヤーをはき、よだれのようにさし水をたらしていた。鉋壁はつかれきったようなさし水をたらしつづけ、孔のまわりからはばろばろと黒鉋^{くろくわ}のかけらを落していた。鉋壁ぜんたいがじつとりと汗ばみ、岩盤の重みとさく岩機からの責め苦に、目にみえる、また、目にみえない無数の裂け目を、あやうくもちこたえて、生きもののようにあえいでいる。政吉のまわりでは、やっぱり十五か十六ぐらいの少年手子たちが、まだ熱いタガネだの、ハンマーだのを片づけたり、エヤーホースやウォーターホースをたぐったりしていた。それがすむとさく岩機のとりはずしをはじめた。

乱掘に相応するだけの数のさく岩機がないため、用がすみしだい一台のさく岩機を、あっちの切羽、こっちの切羽へ、いそいではこびあるかねばならなかった。

そこは（どこの切羽もおなじだが）文字どおり焦熱地獄だった。かたい前つばのでた防岩帽の下から、玉の汗が機械油でよごれた目のふち、ほお、あごへとつたわった。みんな半裸だった。さく岩機が廻転し、タガネをくわえたピストンが鉋体にかみついていた間じゅう、天井から、横かべからふるいおとされた鉋粉が、汗にぬれたかれらの肌を黒まだらに『迷彩』していた。それとところどころの鉋壁のくぼみにつるしたカンテラにてらしだされて、『鬼』の肌のようにうかびあがった。

——雷があるいている、——そんな音を坑道いっぱいにとどまさせて鉋車のかけちがう音が、まがりくねったわかれ坑道をつたわってひびいてきた。

「おーい、カンテラ！ 気イつけろど！」

「たいちようぶ！（だいじようぶ）」

日本人と朝鮮人運搬夫のせっぱつまったさけび。ガチャンと輾轡台で鉋車の向きをかえる音。向き合わせにすすんできた鉋車と鉋車、鉋車と人がすれちがうときのきちがいじみた警戒のさけび。それがどれも、人間の声のようにではなくこだまする。鉋石つめをやっているおっ母たちのかなきり声もまじった。

「アンコはこびまでまた、ばかにおそいもんだな」

政吉がつぶやいていると、むこうのわかれ坑道のまがり角にぼっかりカンテラのほのおがみえだした。まもなく、一と足一と足を泥土につっこんでは持ち上げるピシャッ、ピシャッという音をさせて、ほおかむりの娘手子たちが、四角い木の箱をかかえて切羽にちかづいた。

しいたたみコでもいれてよ。な、どうだ、とく子。そのうちおめえとこ、もらいにゆくからな」
少年手子に手をかして、機械をはずしたり、そこらを片づけたりしながら、政吉は相手の顔も
みないでからかった。

「ほほうだ！」

とく子といわれた娘手子も政吉おどのほうをみてはいなかった。ア、ン、箱をあげながらつづけ
た。

「二円三十銭でなんぼかええたたみコ買えるだか。ヤミ米コも買えねえでよ。……ひとが知らね
えとおもつてうそこいて！ おど家の可愛いかあコの腹、ぼっこりふくれていたっけど！」

そこまでで、とく子のはつとしたように声をのんだ。

切羽のみんなの手がとまった。

「……………」

バリン！ と坑木の折れる音だった。それが鉱車の音の絶え間をきって、切羽の鉱壁まで反響
した。

「厭んだなァ、おら」

いちばん小さい娘手子のカネ子が消え入るようにつぶやいた。

「どこの坑木だべ」

ひとりがきいた。

「また、……なァ」

バリン！ また時をおいて鳴っていた。

「あ」

政吉がふいにうしろをふりかえった。

「ああ、おっかなかった」

そこにカンテラをさげたタツ子が息をつめたように立っていた。ほおかむり手ぬぐいの下のほおが、カンテラのほのおなじくらい青かった。

「ああ、おら、こんどこそ、とちゅうでつぶされて死ぬかと思った。山うごいて！ 堂屋敷さゆくとき、からだ伸^のじていった坑道、ここさくるとき、腰まげねば通れなかった。それにあつちでもこつちでもバリン、バリンで、坑木折れて。ほんとだっけど、おど。ああ、おら、家さかえりてえ！」

家さかえりてえ！ それがみんなのはらにしてみた。

「さ、おろせ」

政吉がタツ子のせなかのものへ手をかけた。タツ子がないひもとくと、政吉は用心ぶかくとりおろした木箱のふたをあけて、必要なだけの雷管と、マイトと、導火線^{みちびき}をもうひとつの小箱へ分け、もう一度しっかりと木箱をタツ子の背になわせた。

「さ、あとのマイトは、あの伊沢の狸さ、わたししてしまえ、早^{はや}ア。狸が、どうのこうのといったら『政吉おどが、ダイナマイトつてもなア手子童子^{わかし}なんか持ちこびさせるもんでねえ』と、いったといえ！」

そういつて政吉は、タツ子のおおぎめた顔をいたわるようにみた。

「さ、アンコはこびたちも、おくものおいたらいつてしまえ。めんこい娘コ達、何人も切羽でころしたなんていわれで、死んでまでうらまれら。なや、若え衆」

あとの文句は相棒の少年手子にいった。

危険の予感さえ、——生命にかかわる危険の予感さえ、とくに『大東亜戦争』に入つて以後の花岡坑夫は口にだすのを避けていた。坑夫にとっては坑内が戦場だ。そのつもりでやってくれ。これが職頭や坑内保安係をはじめとして、技手、課長までの朝夕の訓諭の中味だった。その訓諭がのみこめないで、あっちがあぶないの、ここがどうしたのと、たまひまかかすることはいいたるものは『非国民』なのだ。だから——坑夫たちとしては何もいうことはなかった。七ツ館鉦床の一番坑から八番坑まで。それがもう掘りに掘られて、柱（ひとつの鉦床を致命的な崩壊からまもるために、ぜったい掘りのこしておかなければならない鉦床自体の維持柱）さえものこされていない。一坑道ほりあげたらそのからっぽになった坑道を、土砂でうずめてくずれをふせぐ。こうした鉦床採掘の常識でなければならぬ充填作業さえ、とくに忘れられていた。そういう作業の連中もひとりのこらず採鉦や運搬にまわされていた。——だから、バリンとくるのもふしぎではなかった。日に何寸と坑道が落ち、やまがうごく。それもむりがなかった。——

さく岩機はこびの少年手子につづいてタツ子が、それにつづいてアンコはこびの娘たちが立ちさると、政吉はたったひとり手許にのこした少年手子の持ちあげたカンテラの光で、小箱のなかのものをもう一度かぞえた。

「孔は八つだな？」

「ンです。つめるスカ？」

「あ、つめべ」

ふたりは三本か四本ぐらいずつのマイトを、なれた手つきでつまんでは、切羽の孔へさしこんだ。ニトログリセリンの甘ずっぱいにおいが鼻をついた。鋇体のほてりが孔にさしこむふたりの手につたわってくる。ダイナマイトが二本三本と孔をみたと、こんどは雷管をおしこみ、導火線をさしいれた。導火線のまわりに、さっきの娘たちがおいていったアンコをとってつめはじめた。坑内のありあわせの凝灰土を、娘たちの器用な手先が長さ四寸ぐらいの丸棒にまるめて、そのまわりを小砂でまぶしたものだ。導火線は、そのおくの雷管とともに、アンコのおかげで安定した。

「火、つけるスカ」

少年手子があわてぎみにきいた。

「八本ともつめたか？ よく見れ」

少年手子の眼が走るように、孔にたれさがった導火線をかぞえた。七本しかない。

「孔かぞえるより箱みれ。導火線のこつてるべ」

少年手子のおどおどした目つき。政吉はじぶんで、のこった導火線をつまみあげて、さいごの孔にさしこんだ。

「武雄コ、おまえ、なんぼになったや」